

VI 「契丹国（遼朝）の皇帝陵および皇族・貴族墓の 占地に関する一考察」

武田 和哉

はじめに

契丹国（遼朝）〔以下「契丹国」と略称する〕の墓葬に関する研究は、近年の中国国内における調査件数の増大に伴う事例把握数の増加を背景に、いくつかの網羅的研究成果が発表されている。特に、豪華な副葬品を伴う皇帝陵や皇族・貴族層の墓は盗掘の対象となりやすく、そうした事案が発生した後に緊急調査がなされる場合がほとんどであるとも仄聞している。結果として、当該時代の墓葬に関する研究は必然的に庶民層の事例よりも、調査事例が蓄積されている特権階層の事例を研究対象とした内容となっている傾向は否めない。

契丹国以前の墓葬制度の実態については未解明な点が多いが、史料よりみる限りにおいては、他の北アジア遊牧民族と同様に簡素なものであったことが知られる。しかしながら、契丹国成立以降でみれば、皇帝および皇族・貴族などは地下式墓室を構築しており、その構造等は基本的には中華のそれとほとんど異ならない。ただし、墓室内部に描かれた壁画や副葬品の内容に関してみれば、契丹固有の特色が看取できる面も多く存在している（武田2010）。それでも、墓の内部に墓誌を入れている点や、その墓誌の形態なども基本的には中華のそれと大きく異なるものではない。

こうした背景もあり、特に従来の研究では契丹国時代の墓葬研究は、墓室の構造や平面プランの時代的変遷、副葬品の特徴、さらには壁画に描写された当時の様相などを対象としているものが主流を占めていて、立地環境に言及した研究はかなり少ない。その中で、向井佑介は皇帝陵を対象を絞ってその立地や構造について意欲的な論究を行っている（向井2005）。この他にも、立地などに言及した論考は存在するものの、部分的な内容の言及に留まっている。

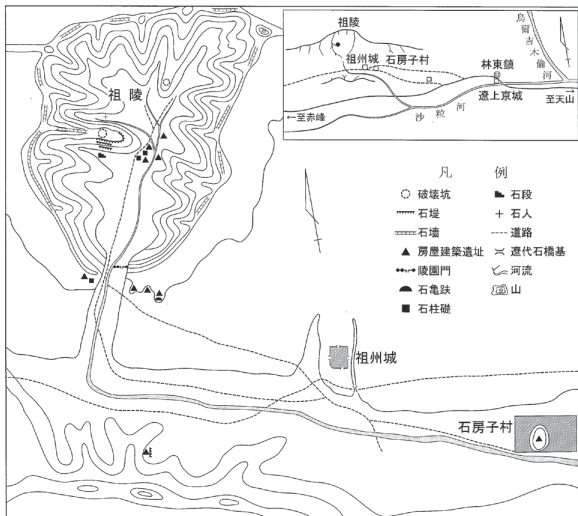
1 『隋書』・『旧唐書』契丹伝などには、契丹国成立以前の契丹族の樹上葬の様相が記されている。

また、現地機関の調査報告は墓室の平面プラン図を掲示することは多いものの、陵墓域全体の様相や周辺地形を示した測量図を掲示することは極めて稀であるため、当該時代の陵墓がどのような地形の場所に占地しているのかという問題に関しては実態の把握や比較・検討が進捗しているとは言えず、多くの課題が残っている。本稿では、契丹国の皇帝陵に加え、皇族・貴族墓についても分析対象として、広く占地の様相と時代的変遷について考察することとしたい。

1. 皇帝陵の立地と地理的特質

本節では、まずは皇帝陵の事例について概観し、立地環境の分析を行う。以下、築造時代の古い順に概観する。

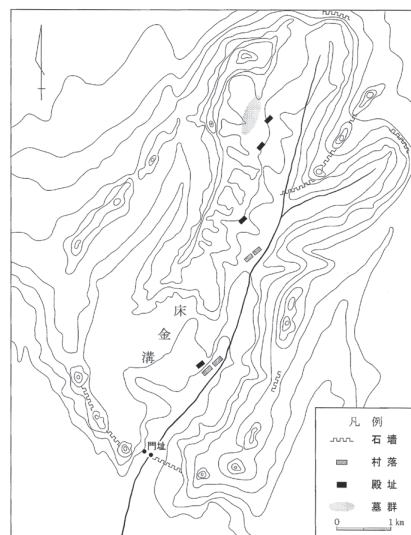
① **祖陵** 祖陵は現在の内蒙古自治区赤峰市巴林左旗内に所在する。初代皇



PL.1 (左上)
祖陵の入口「龍門」

PL.2 (右上)
祖陵中央部より南方
(龍門方面)を望む

PL.3 (左)
祖陵周辺地形図
〔洲1966をもとに、向井2005
にて再トレース・加筆〕



PL. 4 (上) 南側から懷陵を望む

PL. 5 (中) 懷陵入口の「大門」の跡

PL. 6 (下) 懷陵周辺地形図

〔張1984をもとに、向井2005にて再トレース・加筆〕

帝・太祖耶律阿保機の陵である。所在地付近は興安嶺の西縁部に該当しており、岩稜を持つ山地と草原が入り組んだ複雑な地形が多く見られるが、祖陵は袋状を呈し南側で細く開口する谷に占地している。さらに開口部（「龍門」と呼ばれ、岩峰が屹立する）の南正面には、これまた「障壁」よろしく独立峰が位置する様相を呈していて、まさに「天然の要害」と呼ぶにふさわしい地形である。

このほか、外郭の山稜の標高の低い箇所には積石を施して城壁状に築いており、陵墓域の内外を区画する施設である。また、龍門基部には門楼が築造されていたことが、近年の発掘調査によって確認されている（董2011b）。

祖陵内部には、尾根で隔てられた支谷がいくつかあって、太祖陵は中央部よりやや奥まった箇所に位置し、西から派生する尾根上に構築されていて、南側に開口する構造と想定されている。また、その南西付近では数基の墓室の存在が確認された（董2011a）。墓誌が出土せず被葬者名は不明であるが、太祖に連なる宗室の構成員もしくはその妃などである可能性が高い。

龍門の外の東側、すなわち奉陵邑である祖州城に近い小高い尾根上付近から契丹大字の碑文残石が数個出土していたが、近年の発掘調査において、亀

跡の周囲に埦で床張りをした碑亭跡が確認された(董2011c)。これは、『遼史』に記事が見える太宗が立てた「太祖建国碑」の址である可能性が高い²。

② **懷陵** 懷陵は、内蒙古自治区赤峰市巴林右旗内に所在する。前述の祖陵の西北西方約30 km に位置しており、第二代皇帝太宗およびその子の第四代皇帝穆宗の陵である。懷陵が位置しているのは、南北に細長く、南側に開けた袋状の谷である。さらに、南端部の谷幅が狭まった箇所には門址が存在し、さらに門址の両辺から東・西の山稜に向かって土壘状の区画施設址が存在している。袋状の谷の奥部に占地している点や門や区画施設の存在は、祖陵と共通した点であるが、異なっている点としては、周囲を区切る山稜は比較的緩やかで祖陵のように岩稜が露出していない点、谷は奥で右俣と左俣に大きく分かれているなどの地形的形状であろうか。

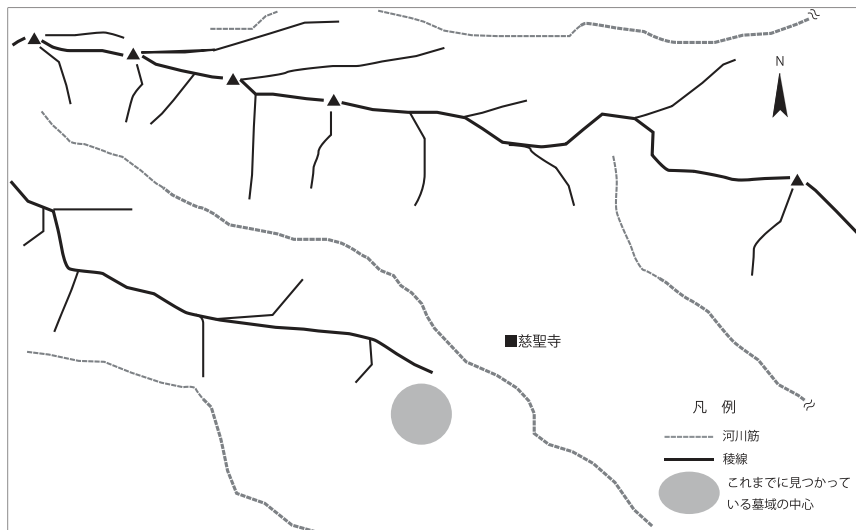
これまでに複数の墓室の存在が確認され、うちいくつかは発掘調査が実施されているが、これらを皇帝陵とみなす見解と、規模的にみて皇帝陵としてはふさわしくないとする見解の双方が存在している(高橋・武田2006)。拙見解では、これまでに調査された墓の規模からして、暗殺された穆宗陵はともかくとしても、太宗陵としては妥当ではないと判断されるので、現段階では所在地は特定されていないとの立場である。なお、4箇所程度で基壇状遺構が確認されており、これは恐らく拝殿等の施設址とみられている。よって、そうした遺構の周辺に皇帝あるいは高位の被葬者の墓室が存在している可能性が高い。

これまでに確認された墓はいずれも陵墓域内の本谷より西側の部分だけであり、したがっていずれとも概ね南東方向に開口する構造と推定される。

また、奉陵邑である懷州は大門の南南西方約8 km に位置している。

③ **顯陵・乾陵** 顯陵・乾陵は、遼寧省北鎮市に所在する。医巫閭山を主峰として北北東から南南西に連なる山脈の中にあり、この山中に太祖長子で東丹国王の倍とその長子で第三代皇帝の世宗が葬られる顯陵、および世宗長子で第五代皇帝の景宗の乾陵が想定されている。本来、契丹国の本宗地は前述の祖陵や懷陵などが所在する地域であるが、そこから遠く離れたこの地に陵を営んだ理由のひとつとしては、やはり宗室内の血統関係や皇位継承の経緯などが関係

2 『遼史』卷三 太宗本紀上・天顯七年六月戊辰条に、「(太宗) 御製太祖建国碑」と見える。



PL.7 龍崗村乾陵陪陵付近の地形概念図 (google earthなどを参考に作成)

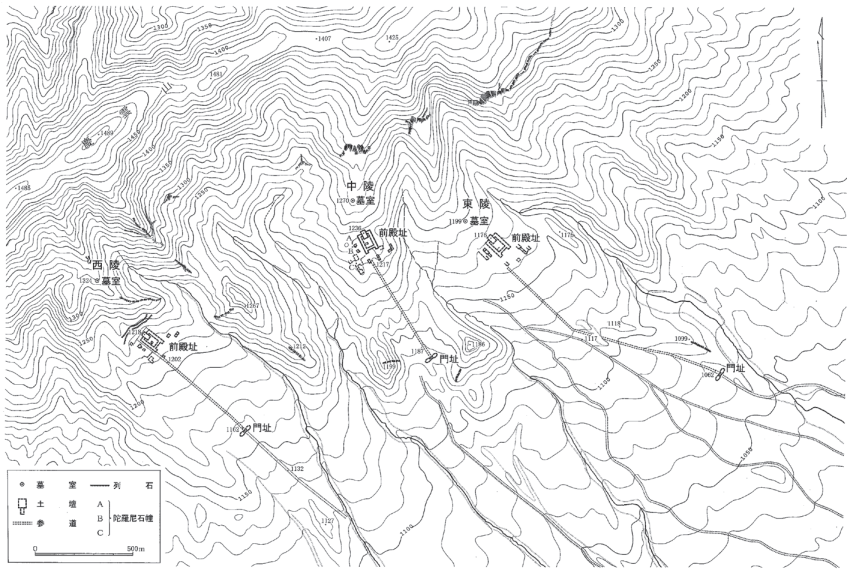
していることは間違いなく、倍の子・孫である世宗・景宗は倍の陵の近くを選んだとみられている³。ただし、現時点では双方とも詳細な位置が特定されていない。さらに、それぞれの奉陵邑である顕州・乾州の位置についても判明していない。

しかしながら、全く手がかりがない訳ではなく、近年発見された第七代皇帝・興宗の従兄弟である耶律宗政・耶律宗允・耶律宗教の墓が医巫閭山東麓の龍崗村付近で見つかっているが(魯ほか1993)、このうち耶律宗政墓誌には「葬乾陵」との記事がみえるので(向1983・王晶辰2002)、この付近が乾陵の一部であるとみて大過ないであろう。その龍崗村乾陵陪葬陵の調査については、残念ながら詳細な報告文は刊行されていないが、付近の地形を衛星写真で確認すると、

3 太祖の死後、併合した渤海国故地を東丹国王として統治していた長男の倍ではなく、次男の太宗が即位したが、その太宗は明確に後嗣を定めぬうちに急死した。当時の政権内では抗争が発生したが、結果として臣僚に推戴された世宗が即位した。その世宗が在位数年にして暗殺されると、次は太宗の子である穆宗が即位した。しかし、その穆宗も次第に政治を顧みず残虐行為を行うなど信望を失い、暗殺される事態となる。かくして、後を嗣いだのは世宗長子の景宗であり、以後は太祖長子・倍の血統が皇帝に就いてゆく。

墓は医巫閭山系の山脈北端に近い場所の東縁に近い地区にあり、北西から南東に開けた長大な谷の中に存在している。複雑な地形様相も看取されるが、谷の方位を除けば概ね懷陵に類似した要素があるように見受けられる。

④ 慶陵 慶陵は内蒙古自治区赤峰市巴林右旗内に所在する。第六代～第八代皇帝である聖宗・興宗・道宗の三代にわたる皇帝・皇后の合葬陵である。既に20世紀の初期から鳥居龍蔵や田村実造・小林行雄らによる調査が行われており、墓室の位置も特定されていて詳細な報告が存在する（鳥居1936、田村・小林1952-53）。この時期は、契丹国の中では興隆期に相当している。聖宗は景宗の



PL.11 (左上) 慶陵を遠く望む PL.12 (右上) 慶陵東陵付近と上部に見える岩稜
 PL.13 (下) 慶陵周辺地形図〔田村他1952をもとに、向井2005にて再トレース・加筆〕

長子であったが、結果としてその陵墓は祖陵や懷陵にも比較的近い、いわば契丹の本宗地の中に営まれた。懷陵の北東約50 kmの地に該当し、奉陵邑である慶州は、慶陵の東南約15 kmの位置にあり、現在でも城壁が良好に残り、中には楼阁式塔の白塔が存在する。慶州は、後半期には仏教の中心地としても栄えた（藤原2006）。

構造・立地が明確となっている祖陵・懷陵と慶陵を比較した場合、大きく異なるのは、祖陵や懷陵のように袋状の谷地形には占地しておらず、独立峰の斜面地に営まれている点であろう。すなわち、慶雲山と呼ばれる山体の南東側斜面に東陵・中陵・西陵⁴が構築されている。いずれとも、谷筋で区切られる広い尾根上にひとつずつ配置される様相を呈している。

また、前殿跡と思しき基壇状遺構と門跡とみられる遺構の双方が、各陵に設置されている点も確認されている。この点は懷陵と似ている。さらに、積石や土塁状の区画施設跡の存在は現時点では確認されていない。ただしこれについては、前述の谷筋が一種の区画施設の役割を果たしているようにも見受けられる。さらに、それぞれの陵の背面には顕著な岩稜が露出している。

なお、近年に至り、東陵の麓付近で二人の皇親の墓が発見されている。いずれも道宗の弟で、耶律弘本・弘世およびそれぞれの妃の合葬墓である（巴林右旗博物館2000）。この発見により、慶陵も祖陵や懷陵と同様に、皇帝・皇后だけではなく、その皇親も葬られた陵であったことが明確となった。

2. 皇族・貴族墓の立地と地理的特質

本節では、皇族・貴族墓について概観する。皇族については、皇帝の直系に該当する宗室構成員である場合には、皇帝陵に陪葬されている場合が多いが、別の地に葬られている場合もある（聖宗庶子の耶律宗愿墓（蓋2007）など）。また、貴族墓とは、皇族と通婚関係にあった国舅族の墓、またはそれらと同等と看做

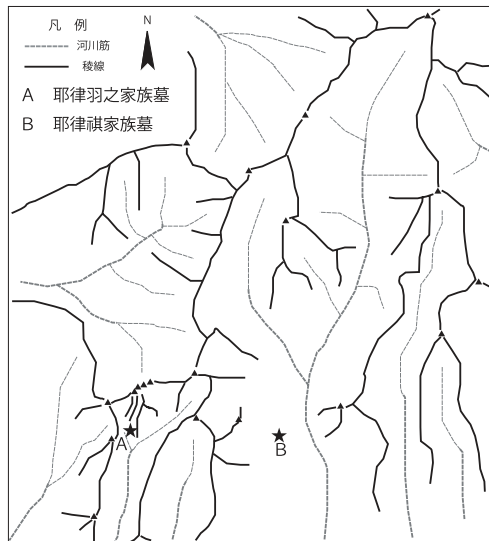
4 慶陵の東陵・中陵・西陵の被葬者を、聖宗・興宗・道宗のいずれに比定するかという問題については、烏居龍蔵は、東陵＝興宗、中陵＝聖宗、西陵＝道宗と比定したが、田村実造は東陵＝聖宗、中陵＝興宗、西陵＝道宗とした。以後もいくつかの見解が提示されている。詳細は牟田口（2005）を参照。ところで、宋・沈括の「夢溪筆談」巻二十四に「契丹墳墓皆在山之東南麓」とあるのは、往時に訪れたことがある慶陵の様相について記したものである。

しうる身分の者が葬られたと考えられる墓を指す。

① **耶律羽之家族墓** 内蒙古自治区赤峰市阿魯科爾沁旗に所在する。耶律羽之は太祖の又従兄弟にあたり、兄の曷魯とともに建国期を支えた重臣であった。特に、渤海併合後の統治等に大きな功績があったとされている。1996年に盗掘を受けて調査が行われ（内蒙古1996）、多数の金銀器や上質の陶磁器等がみつき、併せて墓誌も出土したことで、被葬者が耶律羽之であると判明した。この他に、彼の血統の墓が20余基確認された（蓋2004）。

耶律羽之家族墓は、衛星写真からみる限りでは、袋状の谷の側最も奥まった場所に位置し、北には翼のように尾根を拵げた顕著な岩稜が見られる。この岩稜は裂けたように見える特徴的なもので、耶律羽之墓誌の中にも「裂縫山」と表現されており、かなり遠方からでもその位置が特定できる。墓域は南北方向に長く南側に開けた袋状の谷地形最奥部に位置している。現状では、谷の入口部分などには区間施設は確認できていない。

② **耶律祺家族墓** 同じく阿魯科爾沁旗に所在する。前述の耶律羽之墓に比較的近く、東方わずか約2 km に位置している。1993年に調査を実施したところ、契丹文字文と漢文の墓誌が出土し、漢文墓誌の方は残存状況がわるいもの



PL. 14 (上) 耶律羽之・耶律祺各家族墓周辺の地形概念図 (google earthなどを参考に作成)

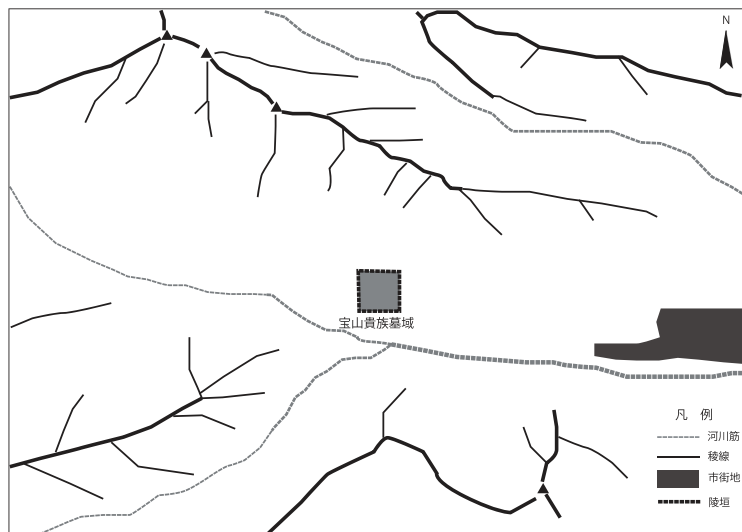
PL. 15 (下) 耶律羽之家族墓 特徴的な岩稜の麓に陵園がある。



の、墓主が耶律禛であることが判明した（蓋2004）。また、この墓誌には「于越」の職位にあったとの記載もあり、これらのことを総合すると、『遼史』に伝のある契丹国末期の重臣・耶律阿思ではないかとする見解がある（蓋2004）。



墓域は、ほぼ南北方向の山稜の東側斜面に位置しており、恐らく東または東南東方向に開口する構造と見受けられる。今までに5～6基の存在が確認されている。この墓域だけでみれば、その立地についてはやや異質な感もぬぐえないが、衛星写真で



PL.16 (上) 耶律禛墓とその背面の山稜

PL.17 (中) 宝山貴族墓に残る土塁状区画施設の西辺部

PL.18 (下) 宝山貴族墓周辺の地形概念図 (google earthなどを参考に作成)

みる限りでは東西に長い袋状の谷の範囲内にあって、その開口部に近い南端の西側尾根の麓に所在していることが判る。また、報文には方形の陵垣があるとも記す(蓋2004)。なお、この谷の奥方で契丹国時代の墓が見つまっているかどうかは知られていない。あるいは、もしこの谷全体が一連の墓域であれば、前述の懷陵や耶律羽之家族墓とも似た例として理解できるであろう。あと、後背の山稜には目立たぬものの岩稜の露頭がみられる。

③ **宝山貴族墓** 同じく阿魯科爾沁旗に所在する。前述の耶律羽之墓からはやや離れており、南西方約60 km に位置する。1993・1996年の2度発掘調査が行われ、2基の墓からなる墓域と確認された(内蒙古1998)。墓の北から北西にかけては顕著な岩稜を伴う山があり、その南麓の平坦地に四周を方形の垣で区切られた陵(墓)園があり、南と東西辺には門が存在していた形跡がある。現在でも比較的良好に残存し、衛星写真からも良好に確認ができる(PL.18参照)。陵(墓)園は東西約200 m、南北約170 m の規模である。

発掘調査の結果、双方の墓とも彩色豊かな壁画が確認され、1号墓室内には天贊二(923)年の題記があり、2号墓室内には契丹小字の墨書が残されていた。双方とも10世紀前半の築造とみられ、陶磁器などの副葬品が出土したが、墓誌は出土せず、具体的な墓主は特定できない。ただし、墓室内の装飾や壁画の質などからみて、高位の人物が葬られていたと想定されている。

さて、この墓域に特徴的な点は方形の区画施設、すなわち陵(墓)垣の存在であろう。これは、今までに見つまっている契丹国時代の陵墓の中ではあまり類を見ないものである。また、共通点としては、墓が南側に開口する構造である点や、後背には顕著な岩稜を伴う山が所在している点などであろう。

④ **北大王墓** 同じく阿魯科爾沁旗に所在する。前述の耶律羽之家族墓の西南西方約40 km に位置している。発見されたのは1975年のことであり、墓域全体で20基の墓を確認したとされているが、明確な配置状況は報告されていない。この中のひとつの墓から契丹大字と漢文の墓誌2面が出土した(馬・項1997)。漢文墓誌によると、墓主は「北大王万辛」と記され、没年は興宗朝の重熙十(1041)年であった。北大王とは、契丹国の官制でいうところの北院大王のことであり、基本的には耶律姓の皇族をして任用する高位の職官である(武田1989)。よって、『全遼文』などでは、墓誌に姓の記述がみえないものの敢えて墓主名を「耶律万辛」とするなどの見解もある(陳1982など)。

さて、北大王墓は、やはり細長い谷地形の最奥部に位置しているが、谷は衛星写真等で概観すると、北東から北北東の方向に開けている。よって、墓も地形に制約されて、概ね北東方向に開口する構造ではないかと推測されるが、明確な報告がないため確認できない。ただし、いずれにしても東～南東～南の方位に開ける谷あるいは斜面地に営まれる契丹国時代の陵墓の中にあつては、異なった立地環境にある点は指摘しなければならないであろう。

それから、北大王墓の後背すなわち南西方にはきわめて顕著な岩稜が存在している。これは、かなり遠方の谷入口付近からも明確に視認できるもので、耶律羽之家族墓と同様に目立つランドマークであると言える。

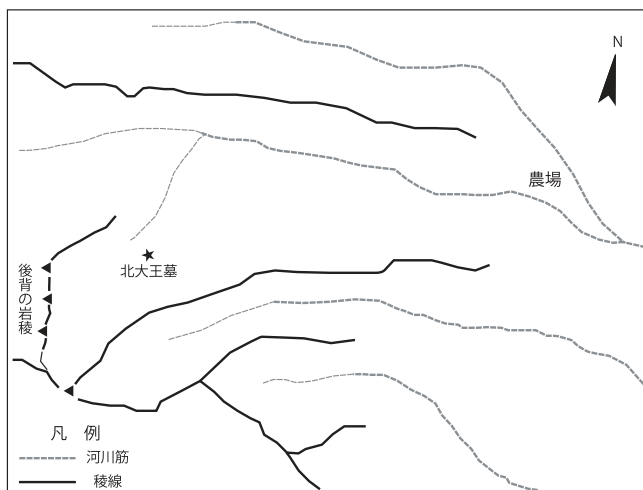
⑤ **韓氏一族墓** 内蒙古自治区赤峰市巴林左旗に所在する。白音罕山の麓に数多くの墓が存在し、その数は約50基程度あるとの報告がなされている（内蒙



PL.19 (左上) 北大王墓遠望 特徴的な岩稜下に墓がある。

PL.20 (右上) 北大王墓上部の岩稜

PL.21 (下) 北大王墓周辺の地形概念図 (google earthなどを参考に作成)



古2002)。現在までに見つかっている契丹国時代の貴族層の墓域としては、最大級の規模であるかもしれない。この韓氏一族とは、かつて太祖に戦役にて拾われて養育された漢人・韓知古の直系の一族であり、中には耶律姓を下賜されて基本的に皇帝しか設置し得ないオールド（宮衛）が置かれた人物（韓徳讓＝耶律隆運）がいる。また、彼以外にも、基本的には皇族が任用される南院大王に就任した人物（韓制心）も輩出しているので、この一族はいわば皇族あるいはその中でも宗室に匹敵する待遇を受けた一族であった。

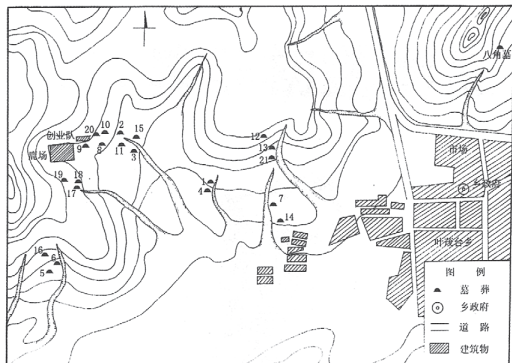
また、この墓地からは多くの墓誌が出土している（蓋2007）。最も大きな墓誌は、韓知古の嗣子である韓匡嗣と夫人（皇族出身）のものであり、これ以外にも



PL. 22 (左上) 韓氏一族墓の後背山地正面の遠望。岩稜を含む山の麓に墓がある。

PL. 23 (右上) 3号墓付近上部より麓を望む。

PL. 24 (下) 韓氏一族墓周辺の地形概念図 (google earthなどを参考に作成)



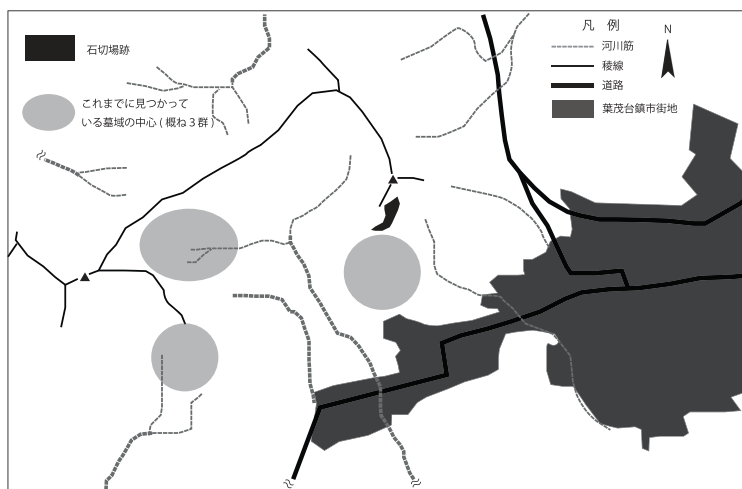
基本的には皇族あるいは皇族に后妃を輩出する特権一族であった国舅族・蕭氏の墓からしか見つかっていない契丹文字墓誌がいくつか出土しているので(武田2012)、こうした点からも通常の皇族・貴族墓とは異なる様相が見受けられる。現時点で把握されてい



PL. 25 (上) 葉茂台遼墓の分布図。(王2002より)

PL. 26 (中) 葉茂台遠望。緩やかな山地にいくつかの山頂が存在する。主峰の下に石切場がある。

PL. 27 (下) 葉茂台遼墓周辺の地形概念図 (google earthなどを参考に作成)



る出土墓誌から判明している被葬者は、概ね10世紀末から11世紀にかけての人物である。

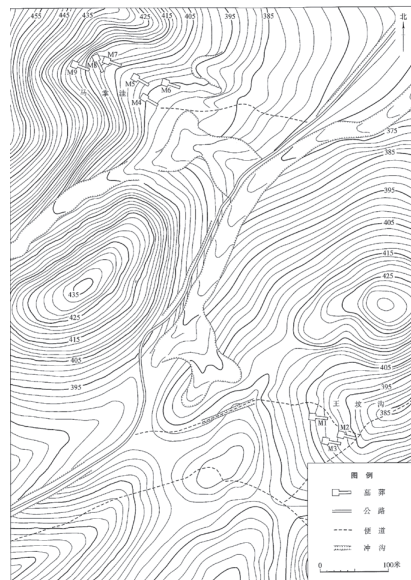
さて、衛星写真等で確認すると、谷は概ね扇形状を呈していて、東南方向に開く地形である。また、開口部は地形的にやや狭まったような形状を呈しているが、門や区画施設の存在は不明である。あと、谷奥正面にはいくつかの支尾根があり、それらには顕著な岩稜が見て取れる。韓匡嗣墓は正面の岩稜よりは東側の山地の中に位置しており、ほぼ南側に開口する。また、現在までに確認された墓は概ねこの付近で見つっているとされている。一方で、対面の西側部分に墓が存在するかどうかは未だ明確でない。

⑥ **葉茂台遼墓** 遼寧省瀋陽市法庫県に所在する。1953年に初めて発掘調査がなされて7基以上の墓が調査され、重要な遺物の出土があった。現在までに20基以上の墓の存在が確認されたという（王秋華2002）。また、契丹国末期の国舅族の要人・蕭義の墓誌も出土している（陳1982）。ただし、各墓から出土した陶磁器を見ると、契丹国前期の特徴を示す鶏冠壺などが出土した墓も含まれることから（王秋華2002）、10世紀頃より末期に至るまで維持されてきた墓域である可能性が高い。

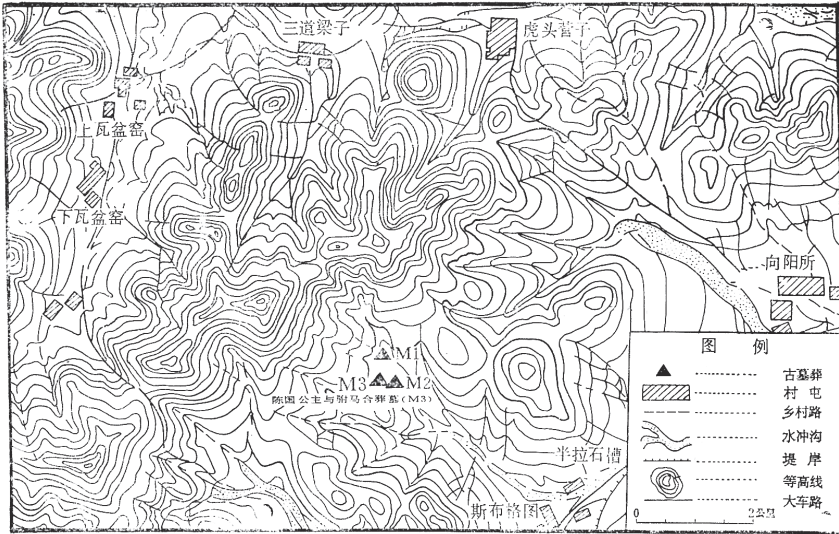
墓域は、袋状の谷ではなく独立したゆるやかな山地の南から南東側の斜面地に占地しており、3群程度に分かれているようである。後背の山地にはいくつかの峰があり、正面の峰の頂上直下には契丹国時代にも利用されていたとされる石切場があり、後代の開削によってさらに巨大な掘削坑が開口していた。現在では岩稜は視認できないが、あるいはかつては存在していたかもしれない。

⑦ その他の皇族・貴族墓の様相

関山遼墓 遼寧省阜新市阜新蒙古族自治县に所在する。詳細な報告文が出されており、地形測量図が揭示



PL. 28 関山遼墓の墓域と周辺地形図
(遼寧省2011)



されているので（遼寧2011）、墓域の状況が把握できる。この墓は既に1962年代に遼寧省博物館により遺物整理がなされ、出土した蕭德温墓誌の録文も報告されている（陳1982・向1983）。蕭德温は、契丹国後期（道宗朝）の国舅族の要人である。その後21世紀に入って、遼寧省文物考古研究所の調査がなされ、9基の墓の存在が確認されている。結果として、複数の墓誌が出土しており、興宗朝から天祚帝に至るまでの期間の墓域であるとみられているが、今後新たな墓が発見される可能性もあろう。



PL. 29（上） 陳国公主墓の周辺地形図分布図（上が北・内蒙古1993より）

PL. 30（下） 陳国公主墓付近の様相

地形図を見る限り、複雑な地形を利用して、墓域は大きくふたつの場所に分かれており、北東の部分は東南東に開く谷に、また南東の部分は、東または北北東に開く谷に、それぞれ位置している。墓誌が出土した墓は年代が判明しているが、そこから墓域の広がりを見ると、古い墓は谷のほぼ中央部にあり、新しい墓はそこより上部に作られていく様相が看取される。そして、全ての墓は

概ね東南東に開口するよう築造されている。報告文に掲載された写真を見る限り、周囲の山稜は緩やかで、岩稜の露頭は見られない。

陳国公主墓 1980年代に未盗掘の状態で見つかり、豪華な副葬品が出土した。出土した墓誌から、聖宗の姪である公主と国舅族の馬との合葬墓であったことが判明した（内蒙古1993）。墓の周辺の地形は、報告文に揭示された図版からみる限りでは、やはり南東方向に開く谷の中央付近に位置している。また、周囲の山には特に顕著な岩稜は見られない。

その他の陵墓域 本稿で概観してきた事例以外にも多くの陵墓が内蒙古自治

PL. 31 皇帝陵および皇族・貴族墓の概要 一覧表

	名	被葬者	時期	地形	区画施設・門等	埋葬施設	摘要
皇帝陵	祖陵	太祖ほか	10世紀以降	袋状で南に開く谷	有・積石・門址	太祖陵+陪陵 2基以上	風水的に整った地形
	懷陵	太宗・穆宗ほか	10世紀以降	袋状で南に開く谷	有・門と土壘址	5基以上	
	顕陵	東丹王・世宗	不明	所在地不明	不明	不明	
	乾陵	景宗・耶律宗政ほか	11世紀以降?	詳細不明・東南東方向斜面地	不明	不明	
	慶陵	聖宗・興宗・道宗・耶律弘本ほか	11~12世紀	独立峰の南東方向斜面	不明（谷筋を利用か?）	聖宗・興宗・道宗（各皇后合葬）陵+陪陵2	各陵上部に岩稜露頭有
皇族・貴族墓	耶律羽之家族墓	耶律羽之および家族	10世紀以降	袋状で南に開く谷（谷奥の部分）	不明	20余基	後背山地に顕著な岩稜
	耶律祺家族墓	耶律祺（耶律阿思?）および家族	12世紀?	袋状で南に開く谷（開口部に近い南端付近）	有（方形との情報・門址の有無は不明）	5~6基	岩稜有
	宝山貴族墓	不明	10世紀	南に開く谷の平坦地	有（方形）・門址	2基	後背山地に顕著な岩稜
	北大王墓	（耶律）万辛	11世紀	北東に開く谷（谷の奥の部分）	不明	20基	後背山地に顕著な岩稜
	韓氏一族墓	韓匡嗣ほか	10世紀末~11世紀末	南東に開く谷（概ね東半部分の南側斜面地）	不明	45基以上	後背山地に顕著な岩稜
	葉茂台遼墓	蕭義ほか	10~12世紀	独立した山地の南・南東側斜面	不明	20基以上	石切場址が存在
	関山遼墓	蕭和・蕭徳温ほか	11~12世紀?	東または東南東に開く谷（墓域が2箇所に分かれている）	不明	9基以上?	墓室はいずれも東南東開口
	陳国公主墓	陳国公主・蕭紹矩ほか	11世紀	南東に開く谷（谷のほぼ中央付近?）	不明	3基	

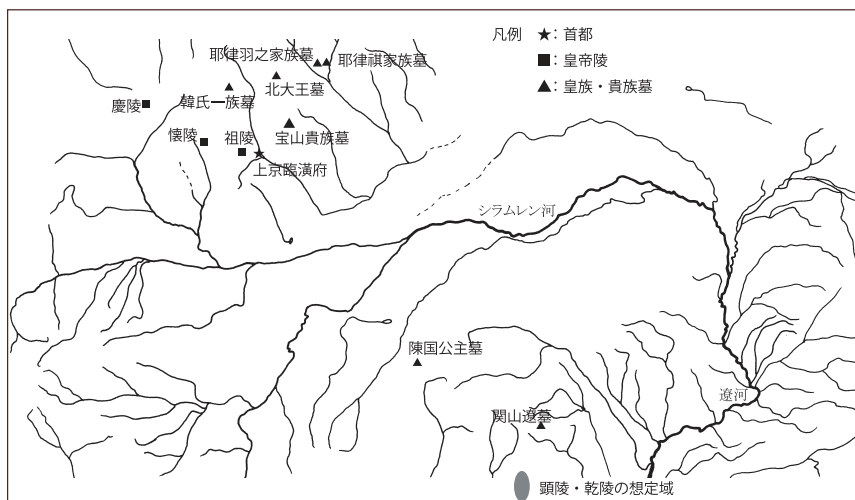
区・遼寧省・河北省・吉林省などで見つかっている。その中には、家族墓と思しき事例もいくつか存在しているが、残念ながら詳細な報告文が公開されていない、あるいは、公開されていても地形等について示す図版・情報等の掲示・記述がなかったりするなどの事由により、結果的に本稿における考察の範囲に含めることは出来なかった。

3. 総括

以上、本稿では皇帝陵だけでなく、皇族や貴族などが葬られた墓の事例について、その占地する地形の状況などに留意しつつ概観してきた。改めて、各事例の地理的分布と概要の一覧表について示しておく（前頁参照）。

さて、既に述べた如く、これら事例の占地に関する情報は必ずしも完全ではないが、そうした状況下でも学問的に重要な課題に関して一定の試論を行うことは研究に携わる者としての責務でもある。以下に、現状の分析から抽出するいくつかの点を指摘しつつ論じておきたい。

地形的特質 前掲の一覧表にて整理したように、ほとんどの事例は東と南の間の方角に向かって開く谷地形の斜面地に構築されている。実は、こうした傾向は以前から多くの研究者によって指摘されてきたことであり、当然にしてその中に築造された墓室もこの地形に沿った方向に開口するようになっているも



PL. 32 皇帝陵・皇族・貴族墓の所在地図

のが多いと認識される。しかしながら、中には北大王墓のように北東方向に開く谷に位置する事例が存在している点にも留意しておきたい。なお、北大王墓の墓室方向は報文に情報がなく詳細な状況は判らない。

また、特に早い時期に築かれた陵墓には、明確な袋状の谷地形に占地している事例が多く見受けられるように思われる。特に、皇帝陵では祖陵や懷陵などでは、地形的にも適った地を選んだ上に、さらに積石や土塁等で堅固な区画施設を構築している点が目を引く。皇帝陵以外では、耶律羽之家族墓が袋状谷の奥に占地している典型例である。ただし、区画施設の存在は明確ではない。

一方で、宝山貴族墓などでは、比較的開けた谷の平坦地に、土塁状の方形の区画施設を築造している事例が目を引く。同様の類例は耶律祺家族墓にもあるとの報告例を除けば現時点では見つかっていない。ちなみに、宝山貴族墓は出土した陶磁器の様式から、比較的早い10世紀頃の墓とみられているが、耶律祺家族墓は、墓誌の記述から末期頃の築造の可能性があり、しかも袋状の谷の開口部近くに位置している。こうした様相から、占地には別次元の複雑な要因等が存在しているのかもしれないが、いずれにしてもこうした陵(墓)垣で陵(墓)園を設定する事例は各時代を通じて存在していたのかもしれない。

これらの様相が見受けられる一方で、後半期に営まれた慶陵は、独立した峰の南東斜面に構築されていて、明らかに祖陵や懷陵とは異なっており、既に向井佑介もその点を指摘している(向井2005)。さらに、皇帝陵以外で見ると、葉茂台遼墓なども比較的閉塞性に乏しく独立した山地の南東側に広がる斜面地に位置していて、慶陵に比べれば面積的にははるかに及ばない規模ではあるが、地形的要素には共通性はあると感じられた。

このほかに、多くの陵墓において顕著な岩稜が存在している点も留意すべき点であるように思われる。祖陵では陵全体を囲む谷地形が険峻でそれ自体が陵垣およびランドマークの役割を果たしていたとみられる。懷陵にはそうした岩稜は特に見あたらなかったが、慶陵では各皇帝陵の上部に岩稜の露頭が存在しており、占地にあたって何らかの意味合いがあったのではないかと指摘は、既に調査報告にも記されている(田村・小林1952-53)。また、皇帝陵以外の事例では、たとえば耶律羽之家族墓や北大王墓、韓氏一族墓などには極めて顕著な岩稜が存在しており、かなり離れた地域からも視認できる大きな規模のものである。

このように概観すると、契丹国時代を通じて概ね維持されている地形的要素と、変化した要素のふたつが存在しているように思われてならない。まず、時代を通じて維持されている地形的要素とは、例外も確かにあるが、概ね東から南の間の方角に開ける谷あるいは斜面地に占地していることである。中華式の地下墓を構築する際には、構造的に開口部分の方角が周辺地形にある程度制約を受けることになるであろうから、かかる斜面地に陵墓域を設定するということは、つまりは墓の開口方向を東から南の間の方角に設定する意図が存在しているからに他ならない。さらには、陵墓域の周囲にはランドマークとなる岩稜が存在している点も同様である。

その一方で、陵墓域を袋状の谷に占地して閉塞性を保持させる要素は、時代の経過とともに変化したと考えられる。すなわち、10世紀中に陵墓域が設定されたと思しき事例では、皇帝陵や皇族・貴族墓を問わず、地形的に袋状の谷を選んで占地しており、特に皇帝陵ではさらに積石や土塁等の施設を人口的に付加して、厳重な閉塞性を形成している。その点では、前述の如く後期に管理された慶陵は明らかに異質である。

こうした変化の背景にある理由・事情は必ずしも明確ではないが、まず第一には、時代の経過とともに、宗室をはじめとする皇族や国舅族など貴族層の構成員が著しく増加した点が挙げられよう。かかる事態は史料上からもうかがえるが⁵、恐らく初期に設定されていた陵墓域では面積的には新たな墓の設置が困難となる事態も想定できる。事実、関山遼墓の様相では、墓域のひとつは新しい墓の構築場所が順次地形的には縁辺部の厳しい場所に遷移していく様相も見受けられる。よって、後半期に占地されたとみられる陵墓域にはそうした面が反映・留意がなされていて、地形的に制約が少なく、将来の展開等に余地のある場所が選ばれたのではないかと推察する。

社会的要因による陵墓域選定と占地 これに対して、いまひとつの理由としては、社会的要因による要因も関係している点は否定できないであろう。契丹国の制度では、宗室・皇族・国舅族をはじめとする特権的階層には「頭下」と

5 『遼史』巻六十四～六十七にある皇子表・公主表・皇族表・外戚表を通覧すると、世代の経過とともに構成員が増大している傾向が明白である。また、近年出土した墓誌などには『遼史』にない情報も記されており、それらを加味した系図が作成されている（蓋2007）。

呼ばれる私領が配分されていた。⁶恐らく、これらの血統の墓域は頭下領として配分された私領の中から適地を選定していたものと思われるが、これら血統集団間の社会的諸要因（例えば、世代進行に伴う血統の分化、領地継承等の問題）により新たに陵墓域を設定せざるを得なくなるような事態があったものと想定される。

例えば、第三代世宗から第五代景宗までの皇帝陵の変遷がそうした事態の一例を如実に示している。すなわち、太宗の急死後に擁立された甥の世宗は数年後に暗殺されたが、祖陵や懷陵とは遠く離れた父の故地に葬られた。それを継いだ穆宗も暗殺され、結果的には父の太宗と同じ陵に葬られている。また、世宗の次代の景宗の陵は世宗陵と祖父の故地の近くに陵を設けている。こうした経過を経て、聖宗以降では再び契丹本宗地に戻って慶陵が設けられ、以後三代にわたり營建されていく。一方では、聖宗の弟の子息（前述の耶律宗政・宗允・宗教）の墓は、乾陵に陪葬されている。このことは、聖宗の代より皇帝陵は本宗地へと遷移しても、景宗の血統を引く傍系の構成員が乾陵に陪葬されることで、結果的には太祖長子の倍以来の陵地を継承したことを意味している。

また、聖宗子息でありながら、慶陵に陪葬されていない事例（耶律宗愿）、あるいは韓氏一族でありながら、別の場所に葬られている例（韓椅・韓瑞などの例）が存在する。前者は、聖宗妃であった漢人出自の母親と同じ墓に葬られた可能性が高いことから、⁷庶出の事由等により、皇帝の子息でありながら墓域が新たに設けられている可能性として見なしている事例である。また、後者は前述の韓知古の子孫でありながら、韓氏一族墓域内ではなく現在の遼寧省朝陽市内で墓が見つかっている。この点については、韓椅の墓誌には墓域選定の経緯等を示

6 『遼史』卷三十九・地理志一・頭下軍州条には「頭下軍州、皆諸王外戚大臣及諸部從征俘掠、或置生口、各團集建州縣以居之。橫帳諸王國舅公主許創立州城、自餘不得建城郭。朝廷賜州縣額。其節度使朝廷命之。刺史以下皆以本主部曲充焉。官位九品之下及井邑商賈之家、征稅各歸頭下、唯酒稅課納上京鹽鐵司。」などと見える。なお、「頭下」に関しては、鳥田（1952）などで論じられているが、未だ充分な研究が尽くされているとは言い難く、課題も多く残されている。

7 興安盟科鶴爾沁右翼中旗博物館に収蔵されている耶律宗愿墓誌は、本来は扎魯特旗より出土したものであり、どうやら扎魯特旗博物館に収蔵されている聖宗妃の耿氏墓誌（聖宗淑儀贈寂善太師墓誌）が出土した墓にほど近い場所から出土した模様である。

唆する記述が見えるので、注目される⁸。

以上のような社会的諸要因、特に血統集団に係る要因により、時代の経過とともに新たな陵墓域が設定されている事例がいくつか確認されるのであるが、それでも契丹の伝統的な習俗観念に適う陵墓域の候補地が無限に存在したとは思われない。よって、陵墓域選定の基準の一部要素は、後代に至って結果的に緩和・変化等をせざるを得なかったのではないかと考えられる。

おわりに

本稿では契丹国時代の皇帝陵および皇族・貴族墓に関して、現状で明確な報告文や考察上の手掛かりが得られる事例を選び、占地に関するひとつの試論を行った。またまだ不明な点が多く、課題も多く存在するが、まずは問題提起を行うことが肝要であると考えられたので、先学が残した記録や断片的な見解も総括しつつ、拙見解も併せて論じた次第である。

本試論を通じて、さらにいくつかの研究課題を認識するに至った。まずは、唐代の陵墓との比較という視点である。唐の場合、皇帝陵では墓道がほぼ南方向に開口する構造で陵園プランが設計され、また方形の陵垣等の施設も明瞭に認められる。その点では、契丹国の皇帝陵は方角は主に東南方向であるもののバラツキもあり、また方形の陵垣施設を用いるのではなくて自然地形を利用して閉塞空間を作り出している例が多く見られる点などで異なっていよう。一方で、顕著な岩稜を意識した占地などは、唐陵の中で主流を占めた山陵型の陵の占地方針と通じる点もあると考えてよい。今後は相違点と共通点の考察と史的評価が必要であろう。

また、風水思想の影響の有無に関する点については、現段階では明確な根拠等が乏しいため詳細な考証は困難であるが、前述の祖陵に関する占地には、風水思想の影響が看取できるのではないかと考えられる。

8 韓椅墓誌の前段には、「我聖元皇帝鳳翔松漠、虎視薊丘。獲桑野之媵臣、建柳城之冢社」とあり、後段には「明年（重熙七）二月十七日、葬公於柳城白盧山之朝陽、以先夫人蕭氏合祔之、從祖考之宅兆、礼也。」と見える。他方、『遼史』卷三十九・地理志三の興中府9条に、彼の祖先の韓知方（古）が柳城を維修して興中府と為す際に大きく関与した記事がみられることと合わせて考えれば、韓椅らの墓地がこの地に設けられた経緯がある程度推察されるであろう。

以上の拙見解が、今後も予測される新たな発見により見直され、将来的に新たな見解が提示されていくことを期待しつつ、擱筆する。

《参考文献》

【日本文】（編著者五十音順）

- 東潮（2007）「遼代壁画資料」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』14 pp.133-231
- 今野春樹（2003）「遼代契丹墓の研究」『考古学雑誌』87-3 pp.1-35
- 来村多加史（1991）「唐陵選地考」『関西大学考古等資料室紀要』8 pp.15-49
- 同（2001）『唐代皇帝陵の研究』学生社
- 島田正郎（1952）『遼代社会史研究』三和書房 のち巖南堂書店より復刊（1978）
- 高橋学而・武田和哉（2006）「赤峰市域契丹国（遼朝）時代遺跡の概要 2. 陵墓」『草原の王朝・契丹国（遼朝）の遺跡と文物』勉誠出版 pp.24-35
- 武田和哉（1989）「遼朝の北院大王・南院大王について」『立命館史学』10
- 同（2010）「契丹国の成立と中華文化圏の拡大」『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会 pp.357-380
- 同（2012）「契丹文字墓誌の姿からわかること—契丹国時代墓誌の様式を探る—」『Field+』no.8 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 田村実造・小林行雄ほか（1952-53）『慶陵』I・II 京都大学文学部
- 鳥居龍蔵（1936）『考古學上より見たる遼之文化圖譜』（全四冊）東方文化學院東京研究所
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館（2010）『大唐皇帝陵』〔平城遷都1300年記念春季特別展図録〕
- 藤原崇人（2006）「赤峰市域契丹国（遼朝）時代遺跡の概要 3. 寺院・仏塔」『草原の王朝・契丹国（遼朝）の遺跡と文物』勉誠出版 pp.36-51
- 古松崇志（2011）「契丹皇帝の喪葬儀礼」『遼文化・慶陵一帯調査報告書2011』京都大学大学院文学研究科 pp.1-62
- 向井佑介（2005）「遼代皇帝陵の立地と構造」『遼文化・慶陵一帯調査報告書2005』京都大学大学院文学研究科 pp.193-212
- 牟田口章人（2005）「慶陵被葬者についての新知見」『遼文化・慶陵一帯調査報告書2005』京都大学大学院文学研究科 pp.213-231

【中国文】（刊行順）

- 洲傑（賈洲傑）（1966）「内蒙古昭盟遼太祖陵調査散記」『考古』1966-5 pp.263-266
- 陳述（1982）『全遼文』中華書局

- 向南（1983）『遼代石刻文編』河南教育出版社
- 劉鳳翥・馬俊山（1983）「契丹大字《北大王墓志》考釈」『文物』1983-9 pp.23-29
- 張松柏（1984）「遼懷州懷陵調査記」『内蒙古文物考古』3 pp.67-72
- 魯宝林・辛癸・吳鵬（1993）「北鎮耶律宗教墓」『遼寧文物學刊』1993-2
- 内蒙古文物考古研究所ほか（1993）『遼陳国公主墓』文物出版社
- 内蒙古文物考古研究所ほか（1996）「遼耶律羽之墓發掘簡報」『文物』1996-1 pp.4-32
- 馬俊山・項春松（1997）「遼北大王万辛墓」『中国考古集成』15 北京出版社 pp.1273-1275
- 内蒙古文物考古研究所ほか（1998）「内蒙古赤峰宝山遼壁画墓發掘簡報」『文物』1998-1 pp.73-95
- 内蒙古文物考古研究所ほか（2002）「白音罕山遼代韓氏家族墓地發掘報告」『内蒙古文物考古』2002-2 pp.19-42
- 赤峰市博物館ほか（1998）「赤峰阿旗罕蘇木蘇木遼墓清理簡報」『内蒙古文物考古』1998-1 pp.26-38
- 巴林右旗博物館（2000）「遼慶陵又有重要發現」『内蒙古文物考古』2000-2 pp.1-16
- 王晶辰ほか（2002）『遼寧碑志』遼寧人民出版社
- 王秋華（2002）『惊世葉茂台』百花文芸出版社
- 蓋之庸（2004）『探尋逝去的王朝—遼耶律羽之墓—』内蒙古大学出版社
- 劉未（2006）「遼代漢人墓葬研究」『漢學研究』24-1 pp.443-482
- 蓋之庸（2007）『内蒙古遼代石刻文研究』〔増訂本〕内蒙古大学出版社
- 劉未（2009）「遼代契丹墓葬研究」『考古學報』2009-4 pp.497-546
- 董新林（2011a）「遼代祖陵陵園考古發現和研究述論」『北方文物』2011-1 pp.75-79
- 同（2011b）「内蒙古巴林左旗遼代祖陵陵園黒龍門址和四号建築基址」『考古』2011-8 pp.3-6
- 同（2011c）「内蒙古巴林左旗遼代祖陵龜趺山建築基址」『考古』2011-1 pp.3-12
- 同（2013）〔翻譯：渡辺健哉〕「遼祖陵陵園遺跡の考古学的新発見と研究」『アジア遊学』160 勉誠出版 pp.221-231
- 遼寧省文物考古研究所（2011）『関山遼墓』文物出版社
- 鄭承燕（2013）「遼代遼寝制度研究」『華西語文學刊』8 pp.138-156
- 劉毅（2013）「關於遼代皇陵的几点認識」『中国国家博物館館刊』2013-3 pp.37-53

《附記》本稿執筆に際し、高橋学而（本研究所協同研究員）・向井佑介（京都府立大学講師）の両氏から有益なる御指導・御協力を賜りました。記して謝意を表します。